**从落语《死神》看日本对西洋文化受容的态度**

**華南師範大学　鄭衍琴**

**摘 要**

日本的古典落语《死神》是三游亭圆朝于明治时代创作的作品，至今仍有较高人气，被多位落语家所演出。有研究者指出，其素材来源于格林童话《起名人死神》或意大利的歌剧《克里斯皮诺和起名人》。

本文重点关注落语《死神》中所体现的日本对西洋文化的受容态度。绪论部分阐述了研究主题、目的和内容。本论部分共包含六章，第一章主要概述《死神》的故事梗概和时代背景，以及落语《死神》和日本的西洋文化受容相关的先行研究。第二章介绍三游亭圆朝引进西洋文化并运用于落语的时代背景等，即日本“文明开化期”的概况。第三章介绍格林童话《起名人死神》和意大利歌剧《克里斯皮诺和起名人》的梗概，并基于情节的发展，将这两部作品与《死神》的各要素进行了对比，归纳总结了异同点。第四章主要分析《死神》中对“死神”这一形象、“起名人”、“蜡烛”等三个西方要素的接受情况。第五章分析圆朝在创作《死神》时对其原著进行的改编。第六章分析《死神》中不同于西洋作品的要素。最后，基于本论部分的分析，总结落语《死神》中所体现出的西洋文化受容态度，并探讨其对当今文艺创作中导入外来文化的启示。

本文作为对明治时代日本西洋文化的受容问题研究的组成部分，对落语《死神》进行了深入研究。以史观今，希望本文对思考当代文化中“外来文化”的定位提供一定参考借鉴。

**关键词：**落语《死神》、西洋文化、受容态度、三游亭圆朝、“文明开化期”

**落語「死神」から見る日本における西洋文化の受容態度**

**要　旨**

日本の古典落語（江戸時代から大正時代にかけて作られた落語）「死神」は三遊亭円朝によって創作された作品であり、グリム童話「死神の名付け親」またはイタリアのオペラ「クリスピーノと代母」を元に翻案されたものであると考えられる。現在に至るまで多くの落語家に演じられる人気作である。

本論文は落語「死神」における西洋文化の受容態度に焦点を当てて研究するものである。「はじめに」においては、研究目的と研究内容などについて述べた。本論には六章が含まれる。第一章は主に落語「死神」のあらすじや舞台設定について述べ、また、落語「死神」及び日本の西洋文化の受容に関する先行研究を概観した。第二章は三遊亭円朝が西洋文化を導入した時代背景、すなわち「文明開化期」を中心に述べた。第三章はグリム童話「死神の名付け親」とイタリアのオペラ「クリスピーノと代母」のあらすじを紹介した。また、物語の進行に沿って三作品の構成要素を比較して相違点を検討した。第四章は、落語「死神」によって導入された、「死神」、「名付け親」、「命の象徴としてのろうそく」といった三つの西洋文化の要素について分析した。第五章は落語「死神」に見られる改編された西洋文化の構成要素を分析した。第六章は、「豆腐」と「占い」の二つの要素を取り上げ、円朝によって取り入れられた西洋物にない日本的な要素について論じた。以上の分析を踏まえ、「終わりに」においては、「死神」に見られる西洋文化の受容態度をまとめ、現代の文芸作品における外来文化の導入に与えられる示唆を得た。

本論文は明治時代における日本の西洋文化の受容に関する研究の一部として、落語「死神」について深く分析を試みた。現在を見るために、歴史に鑑みるのは重要な方法であると言える。本論文は、現在における「外来文化の扱い方」という課題に関する理解を深める一助となることが期待される。

**キーワード：**落語「死神」、西洋文化、受容態度、三遊亭円朝、「文明開化期」

**目次**

[摘 要 I](#_Toc13262360)

[要　旨 II](#_Toc13262361)

[はじめに 1](#_Toc13262362)

[1．先行研究及び本論文の位置付け 2](#_Toc13262363)

[1.1　落語「死神」について 2](#_Toc13262364)

[1.2　落語「死神」に関する研究 3](#_Toc13262365)

[1.3　明治時代における西洋文化の受容に関する研究 4](#_Toc13262366)

[1.4　本論文の位置付け 5](#_Toc13262367)

[2．日本における文明開化と文化の受容 6](#_Toc13262368)

[2.1　日本における文化の受容 6](#_Toc13262369)

[2.2　三遊亭円朝と「文明開化」 7](#_Toc13262370)

[3．三遊亭円朝の「死神」の翻案の元とされる両作品 9](#_Toc13262371)

[3.1　「名付け親」と「代母」 9](#_Toc13262372)

[3.2　「死神」との比較 10](#_Toc13262373)

[3.2.1　構成要素の比較 10](#_Toc13262374)

[3.2.2　物語の流れの比較 12](#_Toc13262375)

[4．「死神」における西洋文化の導入 14](#_Toc13262376)

[4.1　死神というイメージ 14](#_Toc13262377)

[4.1.1　「名付け親」と「代母」における死神 14](#_Toc13262378)

[4.1.2　江戸時代における死神 15](#_Toc13262379)

[4.2　名付け親というイメージ 17](#_Toc13262380)

[4.3　命の象徴としてのろうそく 17](#_Toc13262381)

[5．「死神」における構成要素の改編 19](#_Toc13262382)

[5.1　死神が主人公を助ける理由について 19](#_Toc13262383)

[5.2　薬の内容について 21](#_Toc13262384)

[5.3　主人公が病人を治す動機について 21](#_Toc13262385)

[6．日本文化的要素の新たな取り入れ 23](#_Toc13262386)

[6.1　「豆腐」について 23](#_Toc13262387)

[6.2　「占い」について 24](#_Toc13262388)

[終わりに 26](#_Toc13262389)

[参考文献 27](#_Toc13262390)

[謝辞 30](#_Toc13262391)

**はじめに**

本論文は、近代落語の開祖と言われる三遊亭円朝（以下、円朝と略す）の創作落語[[1]](#footnote-1)「死神」に見られる西洋文化の受容態度について研究するものである。

円朝は落語家として幕末から明治にかけて活躍し、近代落語の創作に西洋文化を取り入れ、落語に新たな命を与えた。その中で、代表作と言える「死神」は円朝がなくなった後、様々な落語家により寄席にかけられ、現代に至るまで好評を博している作品である。落語「死神」は、グリム童話「死神の名付け親」（以下、本文中「名付け親」と略す）もしくはイタリアのオペラ「クリスピーノと」[[2]](#footnote-2)（以下、本文中「代母」と略す）という西洋物を元に翻案されたものとされている。

本論文は、西洋文化の要素を導入し成功を収めた「死神」を研究対象とし、その中における諸構成要素を、翻案の元とされる作品と比較して分析を行う。分析結果に基づき、「死神」に見られる西洋文化の受容態度について検討し、文芸作品における外来文化の導入への示唆を得ようとする。

**1．先行研究及び本論文の位置付け**

**1.1　落語「死神」について**

先行研究の概観に先立ち、落語「死神」のルーツ、時代背景、あらすじ及び構成要素について述べる。「死神」の演じ方は落語家によって様々であるが、本論文は円朝による創作噺の「死神」[[3]](#footnote-3)に準じて分析を行う。

落語「死神」は明治二十年代（1887-1896年）に、円朝が「名付け親」か「代母」を翻案して創作した噺と考えられている[[4]](#footnote-4)。噺にある「両」や「分」という金額の単位は江戸時代に使用されるものであり、噺の舞台である「大川端」は江戸にある場所であることから、「死神」の舞台は江戸時代の江戸に置かれていると推測される。

「死神」における主要な登場人物は死神、亭主、女房である。子供の名付け親を拵える金がないため、女房と喧嘩し、悩んでいる亭主は、死神から医者になれる方法を教わり、富豪になり、子供に良い名を付けられただけでなく、豪遊を始め、最後には一文なしになった。死神の助けで再び医者になったが、三千両を手にするために、死神との約束を破り、無理して病人を助けたため、自分の命を失ってしまったという噺である。

円朝によって創作された後、「死神」は三遊亭金馬（三代目）、三遊亭円生（六代目）、三遊亭円楽（五代目）、柳家小三治、立川志の輔、立川談志など、様々な落語家によって演じられている。また、初代三遊亭円遊が作った「ほまれの幇間」など、この落語を改作して作られた作品も多く出ている。さらに、落語に呪文を加えて演じることや、オチを異なった演じ方でやることも多い。そういった落語家の熱演ぶりから「死神」の人気ぶりがうかがえる。このように、落語「死神」は円朝の創作落語でありながら、当時日本の全体的な西洋文化に対する態度をある程度反映していると言っても過言ではなかろう。

**1.2　落語「死神」に関する研究**

中国では、「死神」の関連研究は管見の限り見られないが、日本では、ルーツ、モチーフ、寿命観、生死観など様々な側面から盛んに研究されている。以下、代表的なものを概観する。

「死神」のルーツに関する代表的な研究として、西本晃二（2002）は『落語「死神」の世界』において、「死神」が西洋の物語による翻案物であると主張し、その源と言われるイタリアのオペラ「代母」とグリム童話「名付け親」における構成要素を比較・分析し、それらが「死神」の翻案の元である可能性について検討している。また、「死神」の著者、創作時期、ネタの提供者についても分析し、本来西洋物である死神の日本化を議論して日本の「死神」の特徴を指摘している。

梅内幸信（2011）は「『死神』モチーフ再考：『死神の名付け親』(KHM44)と古典落語『死神』との比較検討」において、「代母」、「名付け親」と「死神」の三作品を比較し、「代母」は「死神」の翻案の元である可能性が低いが、「名付け親」は「死神」と相違点があるものの、「死神の生死の判断の教え」以外は本質的な差異は見当たらないと指摘し、「死神」の種本である可能性が高いと主張している。また、辻絵理子（2010）は「死を呑む鳥：カラドリオスと落語『死神』の淵源」において、「死神」における死神の役割について中世ヨーロッパの教本である「フィシオロゴス」にあるカラドリオスという鳥の役割と比較し、後者は前者の淵源である可能性を指摘している。

「死神」のモチーフについては、梅内幸信（2011）は「『死神』モチーフ再考：『死神の名付け親』(KHM44)と古典落語『死神』との比較検討」において、「名付け親」と「死神」における、主人公、死神の役割などの13項目を比較している。梅内幸信（2013）はさらに、「古典落語『死神』に関するモチーフ分析と呪文について：『死神の名付け親』(KHM44)との比較において」で、両者の言語的・文化的要素、及び各落語家が演じる「死神」における呪文の比較を通して「死神」のモチーフを分析し、呪文の源と成立過程を跡付け、「死とお金の呪縛から人間は、なかなか解放されない｡人間は、生とお金に執着する｡それゆえにこそ、『死神』のモチーフは、人間の魂を捕えて離さないのである｡」と指摘している[[5]](#footnote-5)。

また、医学研究の分野では、篠田由美子（2010）は、進行・転移がん患者の圓遊版である「ほまれの幇間」を取り上げて寿命観について分析している。信岡祐彦等（2016）は、「意見：シネメデュケーションの題材―落語『死神』」において、シネメデュケーション[[6]](#footnote-6)のケアにあたる人々に患者の死と関連した葛藤を理解させるために、「死神」とその題材として使用する可能性について、聴者に想像力が求められ、分量が適当であり、日本人の一般的な価値観や生死観を表すという落語の特徴から検討している。

**1.3　明治時代における西洋文化の受容に関する研究**

日本は明治時代以降、食文化、建築、娯楽、文学など、様々な分野において西洋文化の受容が急速に進展してきた。以下、本文と関係の深い明治時代における西洋文化の受容に関する先行研究を概観する。

方献洲（2003）は「日本における西洋文化の受容と展開について」において、日本における西洋文化の受容を蛮学、蘭学、洋学と明治維新、戦後の洋学などに分け、それぞれの展開について考察している。「洋学と明治維新」については、ペリー来航の後、日本は戦争における中国の失敗に鑑みて西洋の科学技術、政治学、法律学、社会学などを積極的に受け入れたと指摘している。また、明治新政府や知識階層による洋学の受け入れへの努力を考察し、明治維新を三十年遅く行われた中国の戊戌変法と比べ、後者の失敗の原因を分析している。

宗教の側面では、安齋伸（1978）は「奄美における移入宗教の受容」において、奄美大島におけるカトリック教の受容と定着について調査し、受容側の要因や宣教側の要因を考察している。

文学の側面では、土谷桃子（1993）は「明治期における異文化受容の一例：採菊の西洋小説の翻案の場合」において、明治時代の翻案小説作者である条野採菊の作品を例にして明治期における西洋小説の理解・受容の様子を考察し、採菊の翻案小説の高度な日本化に高く評価している。

音楽の側面では、玉川裕子（1986）は「明治日本と西洋音楽：制度史からみた『美的受容』の成立」において、明治前期の西洋音楽の受容を振り返り、音楽の受容は社会的、歴史的条件に規定されていると指摘している。また、北澤隆明（2005）は「朝比奈隆と日本の西洋音楽受容：聴衆の『西洋音楽観』との関連から」において、日本を代表する指揮者とされる朝比奈隆が残した記述や生前の言説、彼の聴衆の言説などを対象に、「精神主義」、「普遍概念化」、聴衆の間の「教養主義」という三つの視点から、朝比奈の活動は西洋音楽受容のコンテクストにおける意味や、聴衆側の受容活動について考察している。

言語学の側面では、星野祐子（2017）は「『月刊食道楽』における外来語の機能：明治末期と昭和初期に刊行されたグルメ雑誌を資料にして」において、グルメ雑誌の先駆けである『月刊食道楽』を対象に、明治末期、昭和初期における外来語の使用実態とその機能をそれぞれ分析して比較し、庶民生活における「食」にまつわる外来語がどのように表現されたかについて調査している。

**1.4　本論文の位置付け**

以上の先行研究から分かるように、「死神」は様々な側面から研究が行われてきたが、そのルーツやモチーフに関する議論が従来焦点に当てられ、研究の主流となっている。また、死神という生死にまつわる人物の登場が故に、生死観、寿命観などの観点からの研究も多くされてきた。また、西洋文化の受容については、科学技術、生活様式、文学など、様々な分野で研究が行われてきた。ところが、「西洋文化の受容態度」という観点から、「死神」について体系的な研究は見当たらない。本来、落語という伝統芸能の分野の研究では西洋文化の受容はあまり注目されていない。落語「死神」については、「西洋文化の受容」に近い視点からの研究があっても、「受容態度」にたどるものは見当たらない。

そこで、本論文では、先行研究を踏まえながら、「死神」を取り上げ、落語における「西洋文化の受容態度」に焦点を当てて分析を行う。また、新たに取り入れた自国文化についても検討していく。

**2．日本における文明開化と文化の受容**

**2.1　日本における文化の受容**

藤川吉美（1978）[[7]](#footnote-7)は「文化受容論」において、「文化」を定義し、「文化の受容」について以下のように指摘されている。

「文化」とは、自然と異なり、人間によって作られる生活様式の全体であり、言語や芸術、宗教、習俗など、様々な面を含む。世界の各共同体はそれぞれ自然環境の影響を受けながら、異なった文化を創造する。また、「文化の受容」とは異文化圏との交流を通し、異文化を受け入れて取り込むことである。各文化の共同体は他の共同体との交流を通じて、他文化圏から新たな要素を受容し、固有の文化を発展させる。各文化圏は、独自の文化を持ちながら、普遍的な人類の共通点があるため、互いに交流できるのである。それらの共通点は、各文化圏の交流が成り立つ条件ができている。

異文化受容の条件にとしては「体質への適合性」と「必要」の二要素が提示され、文化の国際化の必要性が強調されている。日本文化は西洋文化と異なり、西洋文化を受容するには、日本文化に適合する要素を含めることと、日本社会にとって必要であることが求められる。

ま近代日本における文化受容の問題については、西川長夫（1991）は、「近代日本における文化受容の諸問題―その基礎的考察―」[[8]](#footnote-8)において、「文化受容」は本質的に二つの価値体系の闘争であり、受け入れる側の存続を前提とし、受容と排除の境界線を明白にする必要性があると指摘し、国民国家の時代にある日本で生まれたものは基本的に「国民文学」や「国民芸術」であるため、近代日本における文化受容の問題を国民統合のイデオロギーと結びつけて考えることは可能であると述べている。また、日本の近代化過程には、欧化主義と国粋主義（日本回帰）という二つの傾向の対立が存在し、そのような対立には世界的普遍性があり、日本における「欧化－回帰」のサイクルが比較的に明確であるのは日本の独自性であると主張している。

文化の受容は世界的な範囲で行われ、受容と排除、変容と維持は文化の発展において避けられない課題である。こういう対立は、近代の日本でいうと、欧化主義と日本回帰との対立である。したがって、どのような文化の受容の態度を取るのかを考えることが有意義だと言える。

落語「死神」の成功は、この作品に西洋文化の導入が成功したことを証明したと言えるだろう。したがって、「死神」によって導入される要素は前述の文化受容の条件を満たしているかどうかを検証することは、この作品の成功の要因を明らかにする一つの方法と見ても良かろう。詳細は第4章で述べる。

**2.2　三遊亭円朝と「文明開化」**

「文明開化」とは明治維新から明治二十年代（1887-1896年）[[9]](#footnote-9)にかけて、西洋の近代思想や生活様式を積極的に取り入れようとした現象である。幕末から明治にかけて、歴史の曲がり角に立つ日本は、条約改正や富国強兵を目的に、積極的に西洋の文明を模倣し、欧風化や近代化を図った。外国に使節団を派遣して工業技術や生活様式を学び、様々な分野で急速な西洋化が見られる。しかし、明治十六年（1883年）に竣工した鹿鳴館は行き過ぎた欧化政策の代表として、国内の批判を招き、同年に払い下げられたことから、極端な欧化は弊害を生じたことがうかがえる。このように、西洋文化を受け入れる時、欧化と日本回帰との対立がしばしば白熱し、社会的な問題を招く要因にもなっていた。

　円朝による西洋の文学作品の翻案には、「死神」のほかに、モーパッサンの「親殺し」を翻案した落語「名人長二」や、ヴィクリンアン・サルドゥの「トスカ」を翻案した落語「錦の舞衣」などがある。円朝は西洋文化の積極的な導入者としての役割を果たしたと言えるだろう。

円朝が西洋物を落語に翻案し、西洋文化を積極的に導入した理由については、円朝自身の境遇や、円朝と文明開化と関連して検討しなければならない。

第一に、円朝自身の境遇による影響である。円朝の落語家としての生涯から見ると、海外文化を自身の落語に取り入れる必要性があると思われる。円朝の創作意欲と大きな関わりを持つのは師の円生との確執であると考える。円朝は7歳にして小円太の名で初めて高座に上がり、10歳にして二つ目に昇進する。円朝と改名して真打になった後人気を博すようになったが、師の円生に疎まれたか、演じようとしている噺を常に円生に先にやられてしまうのであった。それは円朝が創作噺に取り組む一つの理由と見なされている。誰もが演じたことのない落語を創作し、高座で披露するという決心は、円朝が近代落語の祖になることにもつながるのだろう。したがって、日本固有の物だけではなく、積極的に中国や西洋からの物語を落語に取り入れようとしたのは、円朝の創作意欲に深くかかわると言えるだろう。

第二に、円朝が文明開化によって与えられた影響である。幕末に生まれた円朝は身をもって経験していた、ペリー来航や明治維新など、時代を変えるような大事件の発生にも関係があると考えられる。文明開化期に、円朝は政府に「国民教導」という責任を負わされていた。「時代と社会を読み込んだ噺を数多く創作していた」円朝は「文明開化という時代を自覚的に生きた人物」とされている[[10]](#footnote-10)。西本晃二（2002）によると、外国語ができない円朝に、落語「死神」のネタを提供したのは、外国通と知られる福地桜痴であるという。明治維新が起こり、日本社会では、様々な新しい意見が生み出され、渡欧した人も多くなっていた。福地はその中の一人として、ヨーロッパの影響を強く受け、円朝に新たなアイディアや発想をもたらした。円朝は、変革の時代による西洋文化の導入の条件を意識して活用したのであろう。

**3．三遊亭円朝の「死神」の翻案の元とされる両作品**

本章では、「死神」の翻案の元と見られるグリム童話「名付け親」とイタリアのオペラ「代母」のあらすじをまとめ、三作品の諸構成要素について物語の進行に沿って比較する。

**3.1　「名付け親」と「代母」**

「名付け親」（第一話）〈KHM44〉[[11]](#footnote-11)の主要人物は貧乏人の男、死神、貧乏人の息子、王様、お姫さまなどである。

十二人の子供がいた貧乏な男は十三人目の子供ができ、名付け親を探すために大通りに出る。神さま、悪魔、死神が次々にやってきて、名付け親になってくれると宣言したが、男は神さまが不公平で、悪魔が人間を騙したりするといった理由で断る。死神だけが公平であるため、名付け親になってもらった。その子が大きくなったら、死神に医者になる方法を教えてもらった。その方法とは、死神が病人の頭のほうに立ったら、薬草を病人に飲ませて助けるが、死神が足のほうに立ったら病人は助からない。医者は死神に背いて、無理やり王様を助けた間もなく、お姫さまに恋して、再び死神との約束を破って、お姫さまも助けた。それで、死神に洞窟に連れていかれて、死神の復讐によって、命のろうそくが消え、死んでしまったという結末である。

「代母」の登場人物は主にクリスピーノ（貧乏人の靴屋）、代母（死神）、石工、金貸しなどがいる。

子供に名付け親を見つけれることができず、借金をも返せない貧乏人の靴屋クリスピーノは絶望のあげく自殺しようとすると、井戸から「公平の女」、すなわち代母が現れ、名付け親になってくれると約束し、しかも当座に必要な金をくれ、医者になる方法をも教えてくれた。代母が病人の足元など近くにいたら助からないが、いなかったら必ず助かるという方法であった。いい加減な薬を飲ませても名医になれるとした。クリスピーノは屋根から落ちた石工を助け、同業の医者ミラボラーノを押しのけて名医になった。その後、クリスピーノは金貸しの死を見届け、若伯爵とその金貸しの姪女の恋を成就する。数年後、金持ちになったがケチにもなったクリスピーノは妻や子供に辛く当たる。制止に来た代母にさえ食って掛かり、怒った代母に無数の命のろうそくや灯明が燃えている地下の家に連れていかれる。そこで代母ははじめて自分が死神だと告げ、クリスピーノを死なせようとするが、鏡で家族の悲嘆を見せると、クリスピーノは過ちを認め、良き夫・父になると約束したため、地上に送り返した。

**3.2　「死神」との比較**

**3.2.1　構成要素の比較**

本節では、物語の進行に沿って、「死神」、「名付け親」及び「代母」という三つの作品の構成要素を比較して共通点と相違点を明らかにする。

表1は三作品の構成要素を抽出して整理した結果を示している。分析した結果、三作品の構成要素において以下の三つの共通点が見られた。

1. 主人公の出身は貧乏人であること。
2. 死神との出会いのきっかけは貧乏人が名付け親を探すことであり、名付け親になったのは死神であること。
3. 主人公が死神に連れていかれ、命のろうそくを見せられること。

すなわち、上記の三点において、落語「死神」は西洋物からそのまま導入したと言えるだろう。第4章においては、「死神」、「名付け親」、「命のろうそく」という三つの文化的要素を落語によって西洋から導入した要素と見なして分析していく。

**表1　三作品の構成要素の比較**

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 作品構成要素 | グリム童話「死神の名付け親」（第一話）〈KHM44〉（創作時期：1819年） | イタリアのオペラ「クリスピーノと代母」（創作時期：1850年） | 落語「死神」（創作時期：1886-1897年） |
| 主人公 | 貧乏人の息子 | 貧乏な靴屋クリスピーノ | 貧乏人「亭主」 |
| 死神と出会うきっかけ | 名付け親探しに「通りへととびだした」 | 名付け親を見つけられず、おまけに「借金取りに攻め立てられ」、「自殺しようとする」 | 名付け親を拵える金がないため、女房と喧嘩し、「大川端へ出てきた」 |
| 主人公を助けようとしたもの | 「神さま」、「悪魔」、「死神」 | 「公平な女」と名乗った死神 | 「死神」 |
| 死神が主人公を助ける理由 | 友達にしてもらうため | 「医者の中で思い上がった連中をヤッツケルため」 | 「縁」 |
| 生死の判断 | 死神が病人のあたまの方にいると治るが、足の方にいると治らない | 死神が病人の近くにいると治らない | 死神が病人の裾の方にいると治るが、枕元にいると治らない |
| 薬の内容 | 「郊外の森」にはえている「薬草」 | 「いい加減な薬」 | 「茶でもなんでも沸かして切っておく」 |
| 一番目の病人 | 「王さま」 | 「石工」 | お店のお嬢様 |
| その病人を治す動機 | 王さまの命令 | 名医の評判 | 金 |
| 二番目の病人 | 「お姫さま」 | 「金貸し」の姪女「リゼッタ」 | 「御大家」 |
| その病人を治す動機 | 「お姫さま」への恋 | 名医の評判 | 「三千両」の金 |
| 主人公の結末 | 死神の復讐により、命のろうそくの火が消され、命を落とす | 代母に命のろうそくを見せられたが、地上に送り返される | 死神の「家」に連れていかれ、自分の手でろうそくの火を消し、命を落とす |

また、落語「死神」と二つの西洋物の相違点[[12]](#footnote-12)としては、「死神が主人公を助ける理由」、「薬の内容」、「主人公が病人を治す動機」という三つの要素が挙げられるが、3.2.2の図1に基づいて詳述する。

**3.2.2　物語の流れの比較**

図1は三つの物語の流れを示している。

**図1　三作品の物語の流れ**

（左の欄は物語の流れであり、右の欄は異なった構成要素の具体的説明である。）

図1の左の欄に示されたように、三作品の物語は、全体的な流れは共通しており、「貧乏人が名付け親を見つけようとし、死神と出会う→死神が主人公を助けようとし、医者になる方法を主人公に教える→主人公が死神の怒りに触れ、死神に連れていかれ、命のろうそくを見せられる」という流れでストーリーが進んでいる。

一方、右の欄から分かるように、「死神が主人公を助ける理由」、「薬の内容」、「病人を治す動機」という三つの点では、「死神」と他の二作品とは違いがある。円朝は西洋物を翻案する際、上記の点について改編を行ったことが推測される。第5章においては、上記の三つの点を落語「死神」によって「改編された要素」と見なして詳細に分析を行う。

また、落語「死神」には、図1に表示された物語の流れのほか、さらに西洋物にない要素が加えられている。例えば、「死神」の冒頭部の夫婦喧嘩に出た「豆腐」や一番目の病人が訪ねてきた理由としての「占い」などである。それらの要素を「新たに取り入れた要素」と見なし、第6章で詳しく検討していく。

**4．「死神」における西洋文化の導入**

前述したように、「死神」、「名付け親」、「命の象徴としてのろうそく」という三つの要素は落語「死神」によって西洋から導入された要素である。

本章では、「名付け親」と「代母」における上記の要素について分析し、それらは文献資料に基づいて落語「死神」が創作されるまでの日本に存在したのかを探究する。さらに、それらの要素は前述した藤川吉美（1987）に指摘された「異文化受容の条件」を満たしているか、つまり日本社会への適合性または必要性を持っているかについて検討する。

**4.1　死神というイメージ**

**4.1.1　「名付け親」と「代母」における死神**

グリム童話「名付け親」における死神の登場は以下のようである。

それからまた、すたすた歩いて行くと、かさかさになった骨ばかりの死神が、つかつかとやってきて、

「わしを名付け親にしなよ」と言いました。

「どなたです、あなたは」と、男が聞いてみました。

「わしは、だれでもかれでも一様にする死神さ」[[13]](#footnote-13)

「かさかさになった骨ばかり」という死神の外見についての描き方から分かるように、グリム童話における死神は、人間と似たような姿で現れ、人間と会話できる存在である。

また、主人公は死神に出会う前に、神さまと悪魔に出会い、しかも、不公平という理由で神さまを断り、「人間をだましたり、そそのかしたり」するといった理由で悪魔を断った。死神だけ「金もちでも貧乏人でも、差別なしにさらっていきます」というので、死神を子供の名付け親として受け入れた。「さらっていく」という言葉から、死神は人間に死をもたらす恐ろしい存在であることが分かる。

「代母」において、「その井戸の中から、堂々たる女の人が現れて、自殺を押し止めた。」[[14]](#footnote-14) と、代母という単語のあるように、死神は女性の姿で現れる。また、「私は『公平な女』、医者の中で思い上がった連中をヤッツケルために、こうして出てきたのだ。」 と主人公に「公平の女」と名乗って現れた。死神は公平かつ正義感を持つ女であることが分かる。

以上のグリム童話とオペラにおける死神の特徴の共通点としては、「公平」という要素が強調されること、または人間と会話できる存在であり、すなわち人格を与えられている点である。

**4.1.2　江戸時代における死神**

死神という要素が日本社会に適合性を持っているかどうかを検討するには、落語「死神」の前に、日本にも死神が存在していたかどうかを調査する必要がある。

日本において、死神という名称が一般的に使われるようになったのは江戸時代であった[[15]](#footnote-15)。江戸時代に刊行された日本の奇談集『絵本百物語　桃山人夜話』では、死神について以下のように述べている。

死神の一度見いれる時は、必ず横死の難あり。自害し首くくりなどするもみな、此もののさそひてなすことなり。

俗に死神というものは、夭蘖招禍といって、悪念を持ったまま果てた者の気が、また悪念を持つ者に呼応して悪しき所へ引き入れるのである。[[16]](#footnote-16)

「夭蘖招禍」とは、不吉な兆しが起き、災いを招くという意味である。死神は人の「悪念」を介して、人に死の気を引き出し、死の場へ導き、死を繰り返し再現するものである。

また、江戸時代の文学作品というと、近松門左衛門の人形浄瑠璃に、死神の名が何回か上がっている。

例えば、「心中二枚絵草紙」に、「死神の、導く道や、蜉蝣の、はかなき虫も、たまたまは、朝の露に生き残る、それよりもなほ。」[[17]](#footnote-17)がある。また、「心中刃は氷の朔日」に、「ひらに待ちやと制すれば、同じくは今ここでちつとも早うと、死神の誘ふ命のはかなさよ。」[[18]](#footnote-18)が語られている。「心中天の網島」においても、「死に神ついた耳へは、意見も道理も入るまじとは思へども、さりとは愚痴の至り。」[[19]](#footnote-19)「版摺る紙のその中に、あるともしらぬ死にがみに、誘はれ行くも商売に、うとき報いと観念も、とすれば心ひかされて、歩み、悩むぞ道理なる。」[[20]](#footnote-20)と述べられてある。

以上の三作品は皆心中にまつわる話であり、死神はたいてい主人公を死に誘い、死への旅路に導く役割を果たす。主人公は心中で死に至るが、命のはかなさが強調されていることから、死神は「憑き物」のようなものであり、人間の意思を問わず、死神が「ついた」人なら、必ず死に導かれることが分かる。

落語「死神」においては、死神が現れたのは主人公が名付け親を拵える金を探しに「通りへととびだし」、「待てよ、金がねえのは首のねえのに劣るというが、してみるというと、おれは首がねえようなもんだな。首がなければ人間死んでるようなもんだ。いや貧乏神よりこれあ死神だ――」とつぶやいた直後である。つまり、主人公が自分の命の危険を感じた時に死神が現れるということである。

以上の分析から、西洋の人格を与えられた目新しい死神は円朝によって導入されたのであることが示された。また、導入された死神は日本において土着の素地があることが一つの理由に、死神というキャラクターはスムーズに日本社会に馴染み、日本の民衆に受け入れられたと言えるだろう。

**4.2　名付け親というイメージ**

西洋の死神の他に、円朝は西洋から名付け親という要素を落語に取り入れた。

「そのむかしは子どもができますと、名付け親というものをこしらえたもので、金がありますと、すぐに名付け親になる人がございまして、子どもに名がつけられたものでございますが、貧乏人はいつまでも名をつけることができません。」（「死神」　三遊亭円朝）

とあるように、名付け親は、子供が生まれた後名を付けてくれる人のことである。落語において、主人公が女房と喧嘩してついに家を出たのは正にこの「名付け親」を拵える金がないためである。

日本には、古くから名付け親に類似した「」の風習がある。江戸時代には、男子の成年は15歳で、女子の成年は13歳とされ、今の満14歳と12歳に当たる。武家の男の子が元服の時に、有力者に烏帽子親を頼み、前髪を落とし、烏帽子を付けてもらう。同時に、烏帽子親は自分の名の一字を与え、烏帽子名を付けてあげるという風習である。江戸時代は元服の式が庶民の間にも行われ、烏帽子親の風習も広まった[[21]](#footnote-21)。烏帽子親という風習の存在から見ると、円朝が西洋から導入した名付け親は日本に土着の素地があったことが分かる。

**4.3　命の象徴としてのろうそく**

円朝が西洋から導入した三つ目の要素は、ろうそくである。なお、例示の「亭」は「亭主」、「死」は「死神」、「女」は「女房」の略称である。

亭「おや、これあ驚いた、急に明るくなってきました。これあたいへんろうそくでございますな。これあなんでございましょう。」

死「これはみんな人間の寿命だ。」

亭「ええ。」

死「人の寿命だよ。」

亭「なるほど、人間の寿命というものはろうそくの燈のごとくだと言いますが、なるほどほんとうですね。恐れ入ったな……ここのところに恐ろしい目だった一本、まだ火がついたばかりで威勢よく燃えてますな。これあどこのだれというのがすぐにわかりますか。」

（「死神」　三遊亭円朝）

とあるように、ろうそくは寿命の象徴として物語に登場した。日本には、「風前の灯火」という表現が古くから存在していることから、似たような考え方があると言える。「風前の灯火」はつまり「風の前に置かれた灯火」であり、物事がはかなく、危険にさらされ、今にも消えようとする様子が想像できる。

『養生訓』[[22]](#footnote-22)における「およそ人の身は、よはくもろくして、あだなる事、風前の灯火のきえやすきが如し」[[23]](#footnote-23)とあるように、ろうそくは人の身の喩えになり、風の吹きあたるところに置かれるろうそくはすぐにも絶えようとする命の喩えであり、命のはかなさや脆さを表している。

「死神」、「名づけ親」、「命の象徴としてのろうそく」など、円朝が取り入れた要素は日本には全く文化の基礎がないものであるわけではない。土着の素地があるからこそ、日本社会に一定の適合性を持ち、日本人にスムーズに受け入れられたのである。

**5．「死神」における構成要素の改編**

　表1と図1から分かるように、落語「死神」の構成要素の中では、西洋物と大きな違いがあるのは「死神が主人公を助ける理由」「薬の内容」「主人公が病人を治す動機」という三つの要素である。それらの要素は、円朝が西洋物を落語化する際に改編したものであると考えられる。本章では、それぞれについて分析を行い、この作品における西洋文化の受容態度を考察する。

**5.1　死神が主人公を助ける理由について**

表1に示されたように、三つの作品における「死神が主人公を助けた理由」にはそれぞれ違いがある。

「名付け親」においては、神さま、悪魔、死神が次々に現れ、主人公の子供の名付け親になってあげようとした。主人公は「公平」かどうかを基準にし、死神の助けを受け取った。また、死神が主人公を助けたのは、「わしを友だちにするものなら、だれにでもそうしてやるにきまりなのさ。」とあるように、「友達になってもらいたい」という理由である。

また、「代母」においては、死神は「公平な女」という名を乗って現れ、「藪医者をやっつける」ため、主人公を助けた。その流れから分かるように、西洋の二つの作品とも、「公平」という要素を強調した。

それらに対し、落語「死神」においては、「公平」の要素は見られない。死神が主人公に自分を助ける理由を聞かれた時、以下のような答えをした。

死「しかしまあおまえとおれとは縁があるんだな。」

死「しかし袖すり合うも他生の縁、つまずく石も縁の端ということがある。おまえとおれと縁があるんだ。」

（「死神」　三遊亭円朝）

とあるように、「縁がある」ゆえに、死神は主人公の前に現れ、主人公を助けようとする。「縁」はある結果を引き起こす因のことをいう、仏教から由来する語である[[24]](#footnote-24)。江戸時代では、庶民たちは、毎日のようにどこかの寺院で催される「縁日」に出かける風習がある[[25]](#footnote-25)。縁日は「有縁日」の略であり、仏に縁がある日という意味を示す。

円朝が仏教的要素を落語に取り入れた理由は、彼と仏教との深いかかわりが挙げられる。円朝の兄の玄昌は住職になるまで造詣の深い僧であり、兄の影響で、円朝は母とともに江戸谷中の長安寺に住み、兄に仏教を教わり、本堂に独座して勉学し、さらに他の寺院の説教を聞くことで仏教を学んでいた時期がある。円朝が創作した落語を見ると、ところどころに仏教の影響が垣間見える。その代表的なものとして、「真景累ケ淵」の仏教因果系列がある。関山和夫（2001）は『庶民芸能と仏教』において、「円朝を理解するためには、どうしても仏教の立場からの究明が必要である。」[[26]](#footnote-26)「江戸から明治にかけて伝承されていた日本古来の仏教民間説話と信仰の形態を円朝はよく把握していたのである。」[[27]](#footnote-27)と述べている。

江戸時代に、寄席で演じられていた落語は仏教、坊主を扱ったものが多く、人々が何の違和感も感じないまま聴くほど、仏教は人々の生活に浸透したのである。それは、円朝は「縁」という仏教的な要素を「死神」に取り入れることに成功した理由の一つであろう。明治維新と文明開化期を経て、仏教は政府の保護策がなくなっただけでなく、西洋文化の衝撃を受けたため、仏教の地位に大きな動揺が起きた。「三遊亭円朝は、仏教と話芸の密接な関係を示す最後の大物噺家であった。」[[28]](#footnote-28)と称されるように、円朝は仏教を落語の創作に活用している。仏教を生かしながら物語の構成要素を改編することから、西洋文化を鵜呑みにするのではなく、「死神」を日本の風土に馴染ませるよう工夫するという西洋文化の受容態度がうかがえる。

**5.2　薬の内容について**

一般的な医術に見せかけるため、死神の位置を確認し、病人が治るのが分かったら、「薬」を飲ませるのは三つの話の共通点であるが、それぞれに違いがある。グリム童話「名付け親」の死神によるちゃんとした「薬草」に対し、オペラ「代母」では、主人公は「いい加減な薬を捏ねて渡しておけ」という死神の指示を得て、「とんでもない材料を次々と持ってこさせて調和した噴飯物の薬」を病人に飲ませた。一方、落語「死神」では、「むこうで強って薬をくれろと言ったら茶でもなんでも沸かして切っておく。」と死神が主人公に教えた。

「茶」を薬として扱うのは日本文化の取入れのもう一つの表れと思われる。お茶は日本で昔から薬とされる伝統があり、栄西の「喫茶養成記」においてお茶の効能が説かれている。[[29]](#footnote-29)また、1417年に成立したと考えられる『桂川地蔵記』における、薬類を合わせて煎じた「煎じ茶」についての記録によっては、お茶は薬と同列に扱われることが分かる。江戸時代に入ると、江戸では数多くの茶屋が開かれ、お茶は庶民の間に普及され、人々に健康に良い日常飲料として好まれていた[[30]](#footnote-30)。したがって、円朝が落語において、西洋物の丁寧な「薬草」や「噴飯物の薬」のかわりに、「茶」を「薬」とするのは当時日本固有の文化の活用だと言えるだろう。

**5.3　主人公が病人を治す動機について**

表1に示されている通り、グリム童話「名付け親」において、主人公は王さまの命令とお姫さまへの恋が動機に、死神の意思に逆らい、王さまとお姫さまを治したのである。オペラ「代母」において、主人公が病人を治そうとしたのは金のためでもあるが、具体的に描かれた病人は屋根から落ちた「石工」と「金貸し」の姪女「リゼッタ」である。他の医者もいる前で、主人公が病人を治した後、威張り始めることから、名医の評判を得るのも主人公の動機になっており、金の要素は強調されていないことが分かる。

それに対し、落語では、主人公が病人を治すのはすべて金のためであると言える。「三千両」の金を手にするため、主人公はついに死神との約束を破り、「御大家」を治したのである。

病人を治す動機への改編については、二つの効果が挙げられる。

まず、「金」という要素の拡大化によって、「金に目がない」という「貧乏な江戸町民」の人物像が際立つようになる。主人公の貧乏さは噺のところどころに表されている。名付け親を拵える「三両の金」に頭を抱えることや「貧乏神」に憑かれたと自分の貧乏さを嘆き続けること、京大阪の見物から帰ってきた後「また」一文なしになることなどから、主人公の貧しさが覗える。一方、「御大家」は病気を治してもらうため、いきなり「三千両」を出したのである。「三両」と「三千両」との目立った差は江戸における貧富の差を物語り、主人公のキャラクターを成立させる。

次に、主人公の悪人化をその悪い結末と結びつけることによって、勧善懲悪の効果が出てくることも考えられる。この問題に関しては、円朝と「勧善懲悪」の思想との関わりを取り上げなければならない。明治十九年（1886年）、円朝は「落語家頭収」として警察署に呼び出され、「成るべく一席にて勧善懲悪の判然する話を為すべし」との説諭を受ける。そのため、明治二十年代（1887-1896年）に創作された「死神」はそういう勧善懲悪の思想を受けていることが考えられる。金だけで動いている主人公を描き、金で死神を裏切り、命を失ったという流れを通じ、「悪を戒める」という意味合いが覗ける。

病人を治す動機という要素への改編からも、西洋文化を受容する時、独創性を発揮して改編を行い、作品に新たな命を注ぐという受容態度が見られる。

**6．日本文化的要素の新たな取り入れ**

円朝作の「死神」においては、翻案の元にはない「豆腐」と「占い」という二つの日本文化的な要素が取り入れられた。本章ではこの二つの要素について考察する。

**6.1　「豆腐」について**

落語は物語が西洋物にない夫婦喧嘩から始まる。「豆腐」は女房の話に出てきたものである。

女「豆腐の角に頭をぶつけて死んでおしまい。」

（中略）

亭「それも豆腐の角へ頭をぶっつけて死んでしまえと言やあがった。あんな柔らかいものへ頭をぶっつけたって死ねるものか。」

（「死神」三遊亭円朝）

とあるように、亭主が「豆腐の角に頭をぶつけて死んでおしまい。」と女房に言われ、腹が立ったため、大通りに金を拵えに出た。その後も、「それも豆腐の角へ頭をぶっつけて死んでしまえと言やあがった。あんな柔らかいものへ頭をぶっつけたって死ねるものか。」と亭主がぶつぶつ文句を言い続けていた。

落語に由来するとされる「豆腐の角に頭をぶつけて死ね」という諺は現在まで使われてきた。落語「情死の情死」[[31]](#footnote-31)にも、「生きて居たって生甲斐の無い身躰、豆腐の角へ頭をけて死んで仕舞ふ方が好いんだ」があり、「ふがいない者をののしっていうことば」として使われている。また、「冗談を冗談と受け止められないようなつまらない人間を揶揄する言い回し」[[32]](#footnote-32)という意味も持つようになっている。

「豆腐」と言えば、中国が発祥地であり、古代日本に伝来し、円朝が生きていた江戸時代では、豆腐茶屋が多く開かれていた。江戸時代の『豆腐百珍』という豆腐の作り方を紹介した本が人気を博していたことからも分かるように、豆腐は当時、庶民の間でポピュラーな食材であった。落語「死神」は「豆腐」という江戸時代の食文化的要素を活用したことから、西洋文化を導入すると同時に、自国の文化を活用することが分かる。

**6.2　「占い」について**

落語「死神」において、一番目の病人が主人公のところに尋ねてきたのは、「どんな医者へ診せても験が見えねえんで、方角が悪いんじゃないかというので、占者に見てもらうと、こっちの方角の医者にかけるとすぐに治るというんで、頼まれて探しにきたんだ。」という経緯である。このように、「占い」は「豆腐」と同じく、円朝が作品に新しく加えた要素である。

占いは、日本に古くから存在し、『万葉集』に登場する「辻占い」にまで遡ることができる。また、現在でもよく知られているのは『今昔物語集』に見られる安倍晴明をはじめとする平安時代の陰陽師による占いである。江戸時代には、占いが庶民に普及し、様々な占いが行われ、町人たちは占いを深く信じていた。何でも占いに頼る占いに夢中になる遊女もいたのである[[33]](#footnote-33)。江戸庶民の生活を描いた式亭三馬の滑稽本『浮世床』[[34]](#footnote-34)における占師の登場から見ると、占者は日常的な存在であったことが分かる。そういうことから、当時の占いの流行ぶりが覗ける。

したがって、「病気が治らない→方角が悪いと思う→占者に見てもらう→こっちの方角の医者にかけるべきだ」という行動の流れは江戸時代の庶民の日常生活においては極めて一般的であろう。「方角」については、中国から伝えられた、平安時代に盛んになった陰陽道に由来すると思われる。ベルナール・フランク（1996）の『方忌みと方違え』によると、「陰陽道の教えによれば、いかなる人も方角を気にせず、自由に、時・場所を問わず外出したり行動することはできない。実際、方位盤を二四等分した方（方角）に、かくかくの方角を凶とする忌み（禁忌）のかかることがある。その場合を方忌みと言う。」[[35]](#footnote-35)また、江戸時代の小事典である『方角禁忌』[[36]](#footnote-36)にも、方忌みまたは方違えについての記録がある。江戸時代の江戸を舞台としたこの落語に、円朝は庶民の日常生活に存在する「占い」を取り入れることに成功した。また、「占い」という要素を取り入れたことから、落語「死神」は江戸時代の文化を積極的に落語に活用することが分かる。

**終わりに**

　本論文は、円朝作の落語「死神」とその翻案の元について、諸構成要素の共通点と相違点を比較・分析し、円朝が「死神」において導入した西洋物は日本において土着の素地があったことを明らかにした。

また、以下のような西洋文化の受容態度が見えた。第一に、西洋物をそのまま導入するのではなく、様々な要素を改編し、落語化したのである。第二に、作品を日本の土地に馴染ませるよう、日本の伝統文化を生かし、新たな要素を加えることで、西洋物を日本化したのである。そういった外来文化の受容態度は明治だけでなく、現在においても見習う価値があるだろう。開放的に外来の文化を受け入れると同時に、自国の伝統を失わずに、独自性を保つことが重要である。

円朝は数多くの人気作品を創作したが、その中には、落語「死神」以外にも、西洋の文学作品を翻案して創作した作品は「名人長二」、「錦の舞衣」などがある。今後の課題としては、それらの作品における西洋文化の受容についての研究が挙げられる。円朝の創作落語を通じて、文明開化期の日本における西洋文化の受容の様相を明らかにし、現在における外来文化の扱いの在り方を提示することが望ましい。

**参考文献**

1. 安齋伸．奄美における移入宗教の受容[J]．「ソフィア：西洋文化ならびに東西文化交流の研究」．1978．vol.26(4)．pp.114-119
2. 梅内幸信．「死神」モチーフ再考：『死神の名付け親』(KHM44)と古典落語『死神』との比較検討[J]「地域政策科学研究」．2011．vol.8. pp.1-8
3. 梅内幸信．古典落語『死神』に関するモチーフ分析と呪文について：『死神の名付け親』(KHM44)との比較において[J]．「地域政策科学研究」．2013．vol.10．p. 81-99
4. 貝原益軒．『養生訓・和俗童子訓』[M]．東京：原書房．1961．p.32
5. 金田鬼一．死神の名付け親（第一話）〈KHM 44〉『完訳　グリム童話集（二）』[M]．東京：岩波書店．2013
6. 北澤隆明．朝比奈隆と日本の西洋音楽受容：聴衆の「西洋音楽観」との関連から[J]．「音楽文化教育学研究紀要」．2005．vol.17．pp.111-117
7. 三遊亭円朝．『三遊亭円朝全集　第七巻』[G]．東京：角川書店．1975．pp.395-403
8. 式亭三馬．「浮世床」『日本古典文学全集47　洒落本　滑稽本　人情本』[G]東京：小学館．1979
9. 須田努．『三遊亭円朝と民衆世界』[M]．東京：有志舎．2017
10. 篠田由美子．落語『死神』をめぐる二つの寿命観―進行・転移がん患者の葛藤理解のために―[J]．『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』2010．vol.16．pp.1-10
11. 関山和夫．『庶民芸能と仏教』[M]．東京：大蔵出版株式会社．2001
12. 辻絵理子．死を呑む鳥--カラドリオスと落語「死神」の淵源 [J]「地中海研究所紀要」．2010．vol.8．pp.1-10
13. 多田克己．『絵本百物語　桃山人夜話』[M]．東京：国書刊行会．2006
14. 玉川裕子．明治日本と西洋音楽：制度史からみた「美的受容」の成立[J]．「比較文学・文化論集」．1986．vol.3．pp.31-49
15. 土谷桃子．明治期における異文化受容の一例：採菊の西洋小説の翻案の場合[J]．「言語文化と日本語教育」．1993．vol.5．pp.1-10
16. 中江克己．『江戸の冠婚葬祭』[M]．東京：潮出版社．2004
17. 長友千代治．「心中刃は氷の朔日」『近松門左衛門集②〈全二冊〉』[G]．東京：小学館．1998．pp.265-266
18. 長友千代治．「心中二枚絵草紙」『近松門左衛門集②〈全二冊〉』[G]．東京：小学館．1998．p.76
19. 中山清冶．栄西と喫茶養生記[J] ．「東京有明医療大学雑誌」．2012．　vol.4．pp.33-37
20. 西川長夫．近代日本における文化受容の諸問題―その基礎的考察―[J]．「立命館言語文化研究」．1991．vol.2(5/6)．pp.23-56
21. 西村俊範．桃山～江戸中期、庶民のお茶[J]．「人間文化研究」．2017．vol.39．pp.139-159
22. 西本晃二．『落語「死神」の世界』[M]．東京：青蛙房．2002
23. 日本国語大辞典第二版編集委員会．『日本国語大辞典　第二版』[G]．東京：小学館．2000
24. 信岡祐彦・望月篤・伊野美幸．意見：シネメデュケーションの題材―落語「死神」[J]．「医学教育」．2016．vol.47(1)．pp.17-18
25. 塙保己一編．太田藤四郎補．『續群書類従 第31輯上』[M]．東京：ネットアドバンス．2014
26. 林屋辰三郎．『文明開化の研究』[M]．東京：岩波書店．1979
27. 藤川吉美．文化受容論[J]．「科学基礎論研究」．1978．vol.13(4)．pp.171-177
28. ベルナール・フランク．『方忌みと方違え』[M]．東京：岩波書店．1996
29. 方献洲．日本における西洋文化の受容と展開について[J]．「中国文化研究」．vol.20．2003．pp.1-46
30. 星野祐子．『月刊食道楽』における外来語の機能―明治末期と昭和初期に刊行されたグルメ雑誌を資料にして―[J]．「十文字学園女子大学紀要=Bulletin of Jumonji University」．2017．vol.47．pp.91-104
31. 村上健司．『日本妖怪大事典』[G]．東京：角川書店．2005．p.166
32. 平成西鶴．『縁結び恋占い：江戸の娘たちを夢中にさせた』[M]．東京：道出版株式会社．2005
33. 山根為雄．「心中天の網島」．『近松門左衛門集②〈全二冊〉』[G]．東京：小学館．1998．p.394
34. 教育方略：cinemeducation／シネメデュケーション(One Pager)．http://www.scribd.com/doc/75172421．最終検索：2019/1/29
35. 豆腐の角に頭をぶつけて死ね．https://www.weblio.jp/conten/豆腐の角に頭をぶつけて死ね．最終検索：2019/1/29
1. 本論文では、三遊亭円朝によって創作された落語のことを「創作落語」と称する。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「コマーレ」はイタリア語で「死」を意味する。「代母」という書き方はオペラの台本が書かれているイタリア語のみならず、ラテン語（mors,女性）並びにラテン語から派生したネオ・ラテン語の現代語では、いずれも女性名詞であるところから来ている。西本晃二．『落語「死神」の世界』[M]．東京：青蛙房,2002. [↑](#footnote-ref-2)
3. 三遊亭円朝．『三遊亭円朝全集　第七巻』[G]．東京：角川書店．1975：395-403. [↑](#footnote-ref-3)
4. 西本晃二．『落語「死神」の世界』[M]．東京：青蛙房．2002. [↑](#footnote-ref-4)
5. 梅内幸信．古典落語『死神』に関するモチーフ分析と呪文について：『死神の名付け親』(KHM44)との比較において[J]．「地域政策科学研究」．2013．vol.10．pp. 99 [↑](#footnote-ref-5)
6. Cinema+medical+educationの造語であり、映画やテレビ番組の一部を医学教育に使用する教育方略である。教育方略：cinemeducation／シネメデュケーション(One Pager)．http://www.scribd.com/doc/75172421．最終検索：2019/1/29 [↑](#footnote-ref-6)
7. 藤川吉美．文化受容論[J]．「科学基礎論研究」．1978．vol.13(4)．pp.171-177。なお、以降における同一文献からの引用は、本文中に文献名と引用頁を示す。 [↑](#footnote-ref-7)
8. 西川長夫．近代日本における文化受容の諸問題―その基礎的考察―[J]．「立命館言語文化研究」．1991．vol.2(5/6)．pp.23-56 [↑](#footnote-ref-8)
9. 文明開化期の時代区分については、様々な説がある。本文では、林屋辰三郎（1979）『文明開化の研究』における時代区分をとる。林屋は文明開化期を4つの期間に分け、1868－1871年を「一新」の時代とし、1872－1877年を「開化」の時代とし、1877-1881年を「民権」の高揚期とし、1882-1890年を「立憲」への道を歩んだ期間としている。 [↑](#footnote-ref-9)
10. 須田努．『三遊亭円朝と民衆世界』[M]．東京：有志舎．2017．p.ii [↑](#footnote-ref-10)
11. 現在、『グリム童話集』所収の物語は、KHM 番号によって示すことが慣例となっている。KHMとは、元著名Kinder-und Hausmarchonの略語で、番号は1857年刊の決定版に付された物語番号である。金田鬼一．死神の名付け親（第一話）〈KHM 44〉『完訳　グリム童話集（二）』[M]．東京：岩波書店．2013 [↑](#footnote-ref-11)
12. 本論文は落語「死神」は二つの西洋物のどちらから翻案されたのか、つまり翻案の元はどちらなのかという問題には触れないので、相違点を言及する際、二つの西洋物と共に違ったものだけを検討する。 [↑](#footnote-ref-12)
13. 金田鬼一．死神の名付け親（第一話）〈KHM 44〉『完訳　グリム童話集（二）』[M]．東京：岩波書店．2013．p.39 [↑](#footnote-ref-13)
14. 西本晃二．『落語「死神」の世界』[M]．東京：青蛙房．2002．pp.81-86 [↑](#footnote-ref-14)
15. 村上健司．『日本妖怪大事典』[G]．東京：角川書店．2005．p.166 [↑](#footnote-ref-15)
16. 多田克己．『絵本百物語　桃山人夜話』[M]．東京：国書刊行会．p.27 [↑](#footnote-ref-16)
17. 長友千代治．「心中二枚絵草紙」『近松門左衛門集②〈全二冊〉』[G]．東京：小学館．1998．p.76 [↑](#footnote-ref-17)
18. 長友千代治．「心中刃は氷の朔日」『近松門左衛門集②〈全二冊〉』[G]．東京：小学館．1998．pp.265-266 [↑](#footnote-ref-18)
19. 山根為雄．「心中天の網島」．『近松門左衛門集②〈全二冊〉』[G]．東京：小学館．1998．p.394 [↑](#footnote-ref-19)
20. 山根為雄．「心中天の網島」．『近松門左衛門集②〈全二冊〉』[G]．東京：小学館．1998．p.424 [↑](#footnote-ref-20)
21. 中江克己．『江戸の冠婚葬祭』[M]．東京：潮出版社．2004．pp.72-76 [↑](#footnote-ref-21)
22. 『養生訓』は福岡藩の儒学者の貝原益軒によって書かれた、養生についての指南書である。 [↑](#footnote-ref-22)
23. 貝原益軒．『養生訓・和俗童子訓』[M]．東京：原書房．1961．p32 [↑](#footnote-ref-23)
24. 日本国語大辞典第二版編集委員会．『日本国語大辞典　第二版』[G]．東京：小学館．2000 [↑](#footnote-ref-24)
25. 中江克己．『江戸の冠婚葬祭』[M]．東京：潮出版社．2004．pp.216-220 [↑](#footnote-ref-25)
26. 関山和夫．『庶民芸能と仏教』[M]．東京：大蔵出版株式会社．2001．p.216 [↑](#footnote-ref-26)
27. 関山和夫．『庶民芸能と仏教』[M]．東京：大蔵出版株式会社．2001．p.217 [↑](#footnote-ref-27)
28. 関山和夫．『庶民芸能と仏教』[M]．東京：大蔵出版株式会社．2001．p.224 [↑](#footnote-ref-28)
29. 中山清冶．栄西と喫茶養生記[J]．「東京有明医療大学雑誌」．2012．vol.4．pp.33-37 [↑](#footnote-ref-29)
30. 西村俊範．桃山～江戸中期、庶民のお茶[J]．「人間文化研究」．2017．vol.39．pp.139-159 [↑](#footnote-ref-30)
31. 1896年に四代目橘家円喬によって演じられた落語である。日本国語大辞典第二版編集委員会．『日本国語大辞典　第二版』．東京：小学館．2000 [↑](#footnote-ref-31)
32. 豆腐の角に頭をぶつけて死ね．https://www.weblio.jp/conten/豆腐の角に頭をぶつけて死ね．最終検索：2019/1/29． [↑](#footnote-ref-32)
33. 平成西鶴．『縁結び恋占い：江戸の娘たちを夢中にさせた』[M]．東京：道出版株式会社．2005 [↑](#footnote-ref-33)
34. 式亭三馬．「浮世床」『日本古典文学全集47　洒落本　滑稽本　人情本』[G]東京：小学館．1979 [↑](#footnote-ref-34)
35. ベルナール・フランク．『方忌みと方違え』[M]．東京：岩波書店．1996 [↑](#footnote-ref-35)
36. 塙保己一編．太田藤四郎補．『續群書類従 第31輯上』[M]．東京：ネットアドバンス．2014 [↑](#footnote-ref-36)